

報告番号

※

第

号

## 主論文の要旨

### 論文題目

メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する  
考古学的研究

### 氏名

市川 彰

### 論文内容の要旨

マヤ、テオティワカン、アステカなどの諸文明が栄えた文化史的領域を「メソアメリカ」といい、各地で大規模センターが興隆し、繁栄期を迎える紀元後300～900年ごろを「古典期」という。しかし、近年、古典期に先行する先古典期（紀元前1800～紀元後300年）の実態が明らかになるにつれ、両時期の区別が曖昧になってきていた。そこで本研究では、墓制研究による社会階層化の過程とその背景の解明、発掘調査と出土資料の分析を通じたメソアメリカ周縁社会の特質に関する研究を切り口として、メソアメリカ古典期社会の形成過程と特質について考古学的に論究することを目的としている。

序章では、メソアメリカに関する基本的枠組みを概観した上で、メソアメリカ古典期社会の形成過程に関する研究史と現在残されている課題を明確にし、課題解決のための本研究の視点と方法について述べている。現在残されている課題として、先古典期から古典期にかけての通時的視点に基づく、社会階層化の過程とその背景の理解、さらに周縁地域の社会変化の実態解明の必要性を指摘した。また、本研究は墓というひとつの考古資料を通じたメソアメリカレベルの議論と、筆者の現地考古学調査を軸にした小地域レベルでの議論を展開し、統合する点に特色があることを強調している。以下、二部構成で議論を展開し、最後に終章を配し、まとめとしている。

「第Ⅰ部 社会階層化からみたメソアメリカ古典期社会の形成過程」では、まず第1章で社会階層化の過程とその背景の解明に有効な手法である墓制研究について方法論・理論的枠組みを提示している。本研究では、まず「墓への労働投下量」という視点に着目し、墓壙構造の複雑さ、副葬品の種類数の多寡、希少財の副葬割合という3つの基本属性の相関関係を通時的に把握する。そして、これらに権力資源論や二重発展理論を解釈の緩やかな枠組みとして使用し、分析結果の考察をすすめる。

第2～4章では、マヤ地域、オアハカ地域、メキシコ中央高原の主に先古典期から

古典期への通時的变化の追求することのできる遺跡を中心として約 2700 基の墓資料をもちいて各地域にみられる社会階層化の過程とその背景について検討し、第 5 章では各地域の社会階層化の過程とその背景についての個別事例を相対化し、社会階層化からみたメソアメリカ古典期社会の形成過程と特質について論じている。

その結果、階層間格差の二極化という現象が生じることに着目し、①メソアメリカ文明史においては、紀元後 200~300 年頃に社会階層化の画期がみいだせること、②階層間格差の二極化という現象には地域差や時期差が存在し、また支配者層の戦略も異なること、③階層間格差の二極化はおこるが、単純な縦の階層関係を想定するのではなく、各階層内部にも差異化が図られ、中間層や下位層の人々の存在を示唆する重層的な階層秩序があったこと、④先古典期は主にイデオロギー操作に偏向した支配者層像がうかがえ、古典期はそれぞれの社会的文化的背景に応じてイデオロギーに加えて経済的側面や軍事的側面といった実態のある権力資源を有効に使い社会統合を達成していったより世俗的な支配者像を想起させること、⑤共同的性格を強く指向するテオティワカンと独占的性格を強く指向するマヤ地域の大センターが併存する古典期は、メソアメリカ文明史においても特殊な時期であることを主張している。

つづく「第 II 部 周縁からみたメソアメリカ古典期社会の形成過程」では、第 I 部からやや視点を変え、主に筆者の現地考古学調査をもとに、いわゆる地理的文化的周縁と位置づけられるような社会が先古典期から古典期にかけてどのように変化していくのかを論じている。これは、第 I 部の成果に導かれ、メソアメリカ古典期社会の形成過程が多様である背景には、近年明らかとなりつつある周縁社会の独自性や主体性が深く関わっていると考えたからである。

まず第 6 章では、メソアメリカ考古学研究における周縁地域研究を整理し、近年の研究動向では、各地域や個別社会の主体性や独自性が明らかになりつつあるが、依然として研究蓄積は少なく、また周縁という視点に基づき先古典期から古典期への変化の様相を捉えようとした研究がないことを指摘している。この指摘をうけて、周縁という視点から先古典期から古典期への社会変化の様相を明らかにするために、メソアメリカ南東部に位置するチャルチュアパ遺跡を調査対象として、三つの論点を提示した。すなわち、①編年の再整備、②自然災害と社会変化の関係の解明、③周縁社会における社会変化とその背景の解明である。

第 7 章では、通時的研究の根幹となるチャルチュアパ遺跡の変遷過程の再構成をおこなった。建造物変遷の復元、炭素 14 年代測定、土器編年の精緻化をおこない、今後の議論を可能にする時間軸を設定した。さらに、建築活動や土器伝統の連續性から、旧説で指摘されているイロパンゴ火山の噴火による民族集団の交替をうながすような壊滅的影響が後 5 世紀ごろに起きたことは考えにくいと指摘した。第 7 章で示した編年観に立脚した上で、つづく第 8 章では、建造物、石彫、土偶、土器の通時的变化を

検討し、紀元後 300～450 年ごろに各文化要素が連動して変化すること、支配者層の権力資源のうちイデオロギー的側面に急激な変化が生じることを指摘する。さらに、墓の分析から、先古典期後期には比較的平等性の高い社会を想起させる同列位相内の複数の異なる集団が存在する一方で、古典期には厚葬墓の存在から突出した階層上位者が出現したことを明らかにした。

第 9 章では、先古典期から古典期への移行期にみられる変化の理解の鍵となる外来要素の受容過程と社会変化の関係について論じている。チャルチュアパの外来要素の出現時期や各文化要素の特徴の分析を基礎とし、専門家の協力を得て、チャルチュアパ遺跡出土人骨を中心に、ストロンチウム安定同位体分析と歯冠計測分析を実施し、チャルチュアパにみられる外来要素は在地集団が能動的かつ選択的に受容したものであることを明らかにした。さらに先古典期と古典期にみられるチャルチュアパ内部の戦いの痕跡に着目し、周辺の有力センターが外部の影響を強く受けて変化していくなかで、こうした外部要素を能動的かつ選択的に受容した「新たな社会の再編成をもくろむ集団」によって、チャルチュアパ社会が変化するという自説を提示した。

第 10 章では、第 7～9 章までのチャルチュアパの事例を総合的に検討し、「周縁社会の戦略」について提示した。すなわち、地理的文化的周縁と位置づけられるような社会にも、意志ある個人や集団が存在し、常に動的な存在として、社会活動の維持や強化のために主体的に独自の戦略を採用していたことを指摘した。そして、チャルチュアパでは、周辺の大センターの興亡が生じるなかで、周縁であることを積極的に利用し、質的量的に極度な肥大化や複雑化を指向せず社会活動を維持しようとする巧みな戦略が存在することを指摘し、第 II 部のまとめとしている。

終章では、第 I 部と第 II 部の議論の総括をおこなっている。まず、社会階層化という観点からすると、古典期とは、各地で多様な道程を経て、複数の権力資源を操作する支配者層の主導により明瞭な階層秩序が形成され、地域によっては重層的な階層構造をもちつつも階層間格差が二極化する時期とする。そして、先古典期とは区別しメソアメリカ文明の政治史的画期として位置づけられると評価する。さらに、古典期には複数の権力資源を組み合わせ、社会統合をめざす支配者層像が想定できるが、テオティワカンのように共同的性格を強く指向する戦略とマヤ地域の主たるセンターのように独占的性格を強く指向する戦略が併存する時期であることも、古典期の特徴のひとつであると主張する。そして、第 10 章で明らかとなつた「周縁社会の戦略」の存在を想定する立場にたてば、メソアメリカ古典期社会の多様な形成過程の背景には、互いに共通する文化要素を有しながらも、ともに主体ある存在であった中心的な社会とその周縁社会を構成する集団間の様々なせめぎ合いがあつたとまとめている。